

# エディトリアル

## 総合診療医が担う産婦人科診療

公益社団法人地域医療振興協会 総合診療産婦人科養成センター センター長 伊藤雄二

総合診療専門医(以下総合診療医)にとってウィメンズヘルスはプライマリ・ケアとして重要な領域であり、日本プライマリ・ケア連合学会においても女性の医療保健委員会(通称PCOG:Primary Care OB-GYN)においてさまざまなシミュレーションコースを開催し、さらに産婦人科実践研修のニーズおよび受け入れ施設の調査を行い、公表している。一方で総合診療医の研修プログラムにおいて産婦人科は必須とはならなかったが、選択項目のひとつとしてその到達目標が定められており、特にへき地・離島をはじめとした地域においては総合診療医が産婦人科診療に関わるニーズが高い。分娩施設に関しては、ある程度地域での重点化、大規模化は避けて通れないと思われるが、その一方でその地域のウィメンズヘルスや女性診療、分娩はできなくても正常な妊婦健診や救急対応を最低限維持することはその地域の活性化には欠かせないことである。そのために産婦人科医と総合診療医、助産師を含めた医療従事者が連携することは、その地域の分娩を含めたウィメンズヘルスを展開するためのひとつの解決策となり得るのではないだろうか。

今回は特に総合診療医が担う産婦人科診療とその意義をテーマに企画した。今後総合診療医として地域における産婦人科医療を担うために、産婦人科専門研修中の小谷倫子先生には今後の自らのキャリアパスを考える上での展望を、山口純子先生には離島での分娩を継続し、地域の活性化につなげるためには総合診療医が産婦人科診療に関わる必要があり、そのための新たな制度について、県を巻き込んだ活動となる提案をもとに執筆いただいた。また池田裕美枝先生にはウィメンズヘルスの視点から総合診療医として避妊教育や性教育に関わる利点や具体的な実践について、さらに鳴本敬一郎先生には米国での経験を踏まえて家庭医として産婦人科診療にどう関わるか、そのトレーニングはどうあるべきかについて述べていただいた。最後に亀田総合病院で総合診療医との連携、研修に関わっている鈴木 真先生より産婦人科専門医として総合診療医の産婦人科研修のあり方について執筆していただいた。

産婦人科専門医になる医師の数は年々減少しており、新たな専門医制度は地域における産婦人科診療の後退にますます拍車をかけられると思われる。すなわちウィメンズヘルスを含めた女性の総合診療を産婦人科医だけで担うことは不可能であるし、理に適っていない。私は長年のへき地での産婦人科診療の経験を通して地域でもとめられる産婦人科診療は女性の総合診療であると確信している。そのためにも総合診療医の産婦人科研修、地域における診療の実践について、より具体的な地域モデル、ロールモデルを周知し共有することで、産婦人科医と総合診療医との協働や地域での活動がさらに広まり、それが地域におけるウィメンズヘルスの充実や地域での分娩継続と活性化につながることを期待し、今回の特集がその一助となることを願っている。